2011／秋

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次

越前和紙への提言　原研哉さん……1頁
取組紹介　愛媛大学大学院「紙産業特別コース」……3頁
イベントレポート　第一回国際木版画会議……4頁
和紙ミニコーナー……4頁
情報欄　イベント情報、お知らせ……4頁

―越前和紙への提言―

■原 研哉（はら けんや）
デザイナー。1958年生まれ。「もの」のデザインと同様に「こと」のデザインを重視して活動中。2002年、無印良品のアドバイザリーボードのメンバーとなり、アートディレクションを開始する。長野オリンピックの開・閉会式プログラムや、2005年愛知万博の公式ポスターを制作するなど日本の文化に深く根ざした仕事も多い。著書「白」では、和紙などを例に挙げ、白という概念を、色ではなく世界に通用する日本の高度な感覚資源として読み解いている。日本デザインセンター代表取締役。武蔵野美術大学教授。日本デザインコミッティー理事長。日本グラフィックデザイナー協会副会長。

■原研哉さん（デザイナー）「感覚資源としての和紙を」

●産業的でない和紙

グラフィックデザイナーにとって、紙は板前にとってのまな板みたいなものです。若い頃から二十年くらい洋紙メーカーの仕事にも携わってきました。和紙に関しても、人一倍思いが強く、十二、三年前、日本のある和紙産地の新しい企画を立て、かなり深いところまで作り込もうとしたことがありましたが、正直、余り成功しませんでした。デザイナーというのは相当紙を使います。普段使っている洋紙と同じように発注ができ、在庫もあり、品質が安定していて、一つのスピーディなラインに載せられるような産業資材として和紙を提供してもらえるととてもいいのですが、現実は余りにも産業的でない。非常に因習的というか、一つの産地の中でも強烈な閉鎖性があって、それを乗り越えようとすると逆に軋轢が生まれてしまうということもあります。だから大抵の和紙の再生プロジェクトは余りうまくいっていない。再生しようという側は近代的な生産プロセスの中に和紙を組み込もうとするのですが、和紙そのものは非近代的なのです。むしろ非近代的なところに価値があって、生産者側もそこが価値だと思い込んでいる。

●紙というよりプロダクツという発想

僕は最近、和紙を紙と言うよりも、プロダクツというような観点で考えているのです。

「白」という本の中にも書いたのですが、紙が人に覚醒を与え、喜びを与えてくれるのは、「白さ」と「張り」だと思います。自然界には案外白いものはないのです。あっても、それは生死の際にある。例えば、骨が白い。「白」という字は白骨の頭蓋骨の象形です。それから卵が白い。乳も白い。人間の生死の境に不思議と「白」という色が出てくるのです。「いとしろし」という言葉にあるように、何か物事が際だって、立ち上がり、きりりとしている様。緊張感がある状態、そういうものが白で、アースカラーの原料から、漉き上げると白い和紙が出来る。それはすごい驚きで、人間に強烈なイマジネーションを与えて来たと思います。

また、紙には張りがある。紙はピンと立つ。紙は一度握りつぶすともう後戻りできない。壊れやすさと裏腹にあり、そういう切実で、大切な、壊れやすい白い紙の上に、あろうことか、人間は墨で字を書き、絵を描く。要するに取り返しの付かないことをやるわけです。紙の上に何かを書くということは、いさぎよい。失敗するかもしれないけど、成功するとその成果は長くこの世にとどまるかもしれないという期待と緊張が人間の創造力を刺激してきた。

デザイナーは和紙に印刷適性とか、強度ばかりを求めるのですが、もともと木版印刷であるとか、筆で直に書くとか、活版印刷ならできるけれど、洋紙と同じ発想のものではない。そこに強引にオフセット印刷を持ち込もうとすることが間違いで、今言ったようなプロダクツとして捉え直すと、新たな次元が見えてきます。

単行本『白』ドイツ語版、英語版、日本語版、韓国語版 2008年

●感覚資源としての和紙

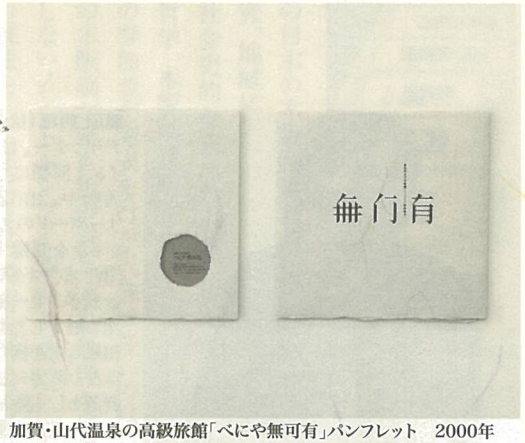
日本もそろそろ、安い工業製品を作って世界中に売りさばくのではなく、価値の采配がうまい国になっていかないといけない。フランスだと、ミシュランガイドにしても、ワインにしても、ファッションにしても、価値のヒエラルキーを構築できています。生活者の希求のレベルが高いのです。

シンガポールによく行きますが、あちらから日本を見ると、千数百年の歴史があり、立ち居振る舞いにも約束事があったりして、まるで京都の冷泉家のように見えるのです（笑）。彼らはお金を儲けてすごいマンションに住んでいますが、歴史がない。中国四千年というけど、王朝が全部前の王朝を壊しながらきています。文化は日本に伝来して、熟成され、先の戦争で負けたといっても、庶民の暮らしの通底にある文化は続いています。日本的なものも職人も残っている。日本は清潔だし、日本人の生活や労働のモラルは高い。こういった日本の美意識

信州の老舗酒造の復刻酒「白金」に和紙を使用　2000年

や感性を漸く資源にして、ものを作っていく時期です。たとえば、日本が世界レベルの観光都市になってくると、一流の食が供される場所や、一流のリゾートホテルには、パンフレットにしても、高度に作られた人間の業の結晶を象徴的に表すような「和紙的なもの」が必要になってくるはずです。

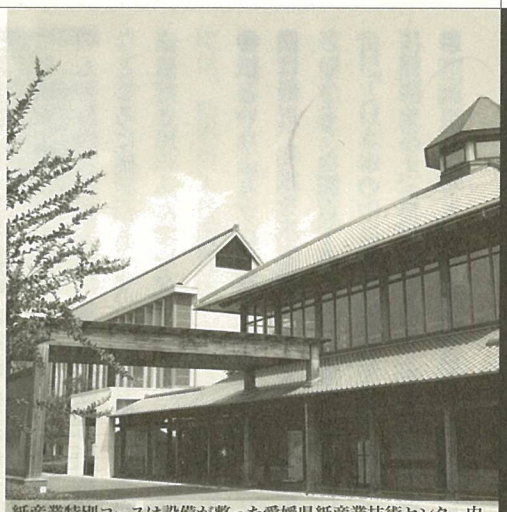
私は、「美意識産業」とか「感覚資源」と言っていますが、一応の豊かさを獲得した国では、自国の素晴らしい文化を下敷きにした価値を産業化していかなくてはいけません。和紙にもこういった戦略が必要でしょう。もともと価値は、産地が作っていただけではなく、需要が作っていた面がある。越前和紙の多様性は、江戸文化があって、発注した人がいたからでしょう。いろんな人達が、我が儘な発注を沢山して、発注元が元気になってくると、産業はそれに応えざるを得なくなってくる。本当に和紙が魅力を発揮できるプロダクツとしての用途を今後ちゃんと獲得し、地球規模で間違いなく出会う所ができれば、和紙の可能性はまだまだあると思います。



加賀・山代温泉の高級旅館「べにや無可有」パンフレット　2000年

日本デザインセンターURL　http://www.ndc.co.jp/

取り組み紹介


紙産業特別コースは設備が整った愛媛県紙産業技術センター内にある。

■愛媛大学大学院「紙産業特別コース」全国初の紙産業人材育成拠点

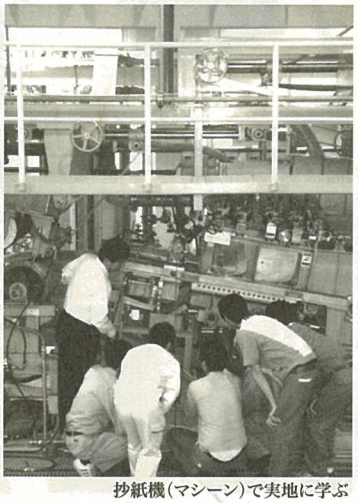
「紙のまち」というと富士市、苫小牧市などを思い浮かべる人も多いだろう。しかし、平成十六年、川之江市、伊予三島市などが合併し誕生した四国中央市が、紙製品出荷額が日本一なのは意外に知られていない。現在九千四百億円の四国の出荷額の大半を、大王製紙、丸住製紙、ユニ・チャームを始め、中小製紙工場の多い愛媛県エリアで稼ぎ出す。昨年、この愛媛県に紙産業の未来を見据えた日本初の大学院、愛媛大学大学院修士課程「紙産業特別コース」が誕生し、一年あまりが経過した。教授の内村浩美氏は高知大で製紙科学を学び、当時の大蔵省印刷局に入局、お札の開発に携わってきた経歴を持つなかなかの熱血漢。印刷局製紙部勤務時代には、工場で三交代の経験もあり、製造現場にも詳しい。

●設立の契機

四国には大企業から中小企業まで、四三四社に及ぶ紙パルプ製造・紙加工等多種多様な紙産業が集積しており、その紙製品の多くがこの愛媛県界隈で生産されている。当地では、お札と切手以外は何でも製造できると言われている。国内需要も尻つぼみの中、中国のめざましい紙生産力の追い上げによる安価な紙も脅威だ。この様な状況下、当地では大量生産型の商品と小ロット・中ロットでの高付加価値型商品を生産して荒波を乗り越えてきている。グローバル経済での強い危機意識もあり、地元の（社）愛媛県パルプ工業会では、平成十七年から「紙産業中核人材育成講座」で、実務経験三年以上の紙産業企業社員を対象に人材育成講座を自主的に行っていた。この試みをより発展させ、複雑多様化する紙産業の幹部候補生を担う目的で、平成二十年、市と商工会議所が、大学院設立の要望書を愛媛大学に提出。独法化で地域から評価される大学を目指していた愛媛大がそれに応え、国や県の連携も加わり、平成二十二年実現の運びとなった。開設場所は、松山市内の愛媛大学ではなく、紙産業の集積地、四国中央市の立地条件を活かし、高速道路近くの愛媛県紙産業技術センター内に置くこととなった。

●カリキュラムの特徴

当コースでは専門教育と現場密着型教育を二本の柱にカリキュラムが組まれている。専門教育では紙産業原論、紙産業プロセス論等の「概論」から始まり、紙加工技術、機械の知識、和紙の知識、薬品・抄紙・コーティング・印刷・環境の知識、紙技術の現在までを俯瞰する「専門技術」、マネジメントや商品開発、工場運営等について学ぶ。一方、現場密着型教育では現場見学学習やプロジェクト研究に力を入れている。昨年度は、地元企業の協力の元、蒸解、パルプ漂白、機械パルプ、古紙処理、最新抄紙機、新聞・段ボール原紙、不織布、手漉き和紙、水引製造、紙加工、製本、オフセット印刷などの製造現場や工場を十五ヶ所以上も訪れ、座学で学んだことを現場で実際に見て学ぶ。あとから疑問が湧けば、校内の実験棟にある抄紙機や塗工機で確認して理解を深めることもできる。「プロジェクト研究」では、自分が設定したテーマを集中的に研究する。昨年入学した一期生は、顔料定着メカニズム、製紙排水有効活用、印刷物の品質向上等をテーマに掲げている。


抄紙機（マシーン）で実地に学ぶ

また、ネイティブスピーカーによる英語プレゼンテーションも重要な科目。海外での学会発表や展示会・商談など、グローバルなシーンに対応できるようにするためだ。

英語プレゼンテーションの授業

特許検索のゼミなども興味深い。インターネットで特許検索しても、最初はちんぷんかんぷんで何が書いてあるのか分からなかった学生も、内村先生から解読のコツを教わることによって、率先して調べることができるように

なってきた。「特許というのは実施例などを読むと実はアイデアの宝庫なのです。商品開発のアイデアを考えろと言っても、考えが出てこない時は、特許検索は考える仕掛けになります。パテントマップを作ってみると、最新の技術動向や狙い目のすき間技術なども見えてきます。技術開発や製品戦略作りに大いに役立ちます。」という内村先生は、印刷局で特許取得ベストファイブにも入っていた。

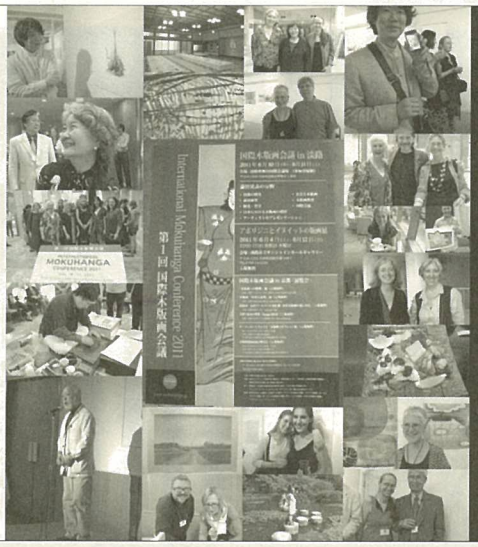
学生の質問に答える内村氏(中央)

●学生生活

一期目入学者は紙企業に勤める社会人五人と工学部から来た学生の六人、二期目は社会人一人と学生三人。二年目に入り、カリキュラムの微調整や改良を加えた結果、今年は又六科目も増えてしまった。少数精鋭で、普通の学部の倍近い科目をこなさなければならないので、学生は実験や研究にヒイヒイ言っているそうだ。

地元では、七月三十一日～八月一日に、市をあげての「紙まつり」が開催された。学生達は、この祭りに企画から参加。紙にまつわるクイズや種類の異なる紙のこよりを使ったヨーヨー釣りのブースを運営した。また、家庭をもつ学生にとっては、研究活動を進めるために家族の理解が必要だから、と研究室メンバーと家族でバーベキューを楽しむこともあるという。内村教授は、このコースをもっと知ってもらおうと各地の企業説明会や経営者セミナーの講演でも大忙しだ。

イベントレポート



■第一回国際木版画会議-京都・淡路「日本の水性木版画と和紙の需要」

世界の木版画家が交流する「第一回国際木版画会議」が、六月七日～十一日、京都と淡路島の二市の会場で開催され、登録された参加者が二十二ヶ国から百八人が集った。この会議に先立つこと十年余り、淡路市で世界に向けた木版画普及の活動を続けてこられた門田けい子氏、佐藤靖之氏に、会議の意図や成果を伺う。

●「平紙」を使って欲しい

三十年前、当時から多くの人が和紙市場に危機感を持ち、インテリア・デザイングッズや和紙アート等の立体物に道を開こうとしていた時、門田さんは敢えて本来の和紙の良さを活かす「平紙」にこだわり、版画の世界に入った。当時、版画は世界的なブームで主たる市場はアメリカ。数多い版画の技法の中でも木版画を手がけている版画出版社、クラウン・ポイント・プレス社(CCP社)を知ることとなる。同社は一九八〇～一九九〇年の十年間、超一流の世界的アーティストを京都の職人(彫り師・摺り師)の元に送り込み、共同で作品制作を行っていた。

「摺り師のことを英語でプリンターというのですが、ちょうどCCP社を訪れた際、コラボ作品の荷をほどく時で、中から非常にきれいな作品が出てきて、プリンターは日本人だというのです。それまでは木版画というと、創作版画、浮世絵、年賀状くらいのイメージしか持っていませんでしたが、全然違う世界がそこにあった。」こうして和紙の平紙の需要を増やしたいという思いは、日本の木版画を世界に広める活動へと繋がった。

●淡路島・長沢アートパーク・プロジェクトの活動

一九九四年から、CCP社のプリンターであった高田英勝氏の協力の元、淡路市(旧津名町)で一週間の第一回木版共同制作ワークショップを町の協力で開始、その後四年間継続開催した。これを機に徐々に津名町には、海外から木版技法を学びたいという問い合わせや申込みが増え、一九九七年から、文化庁のアーティスト・イン・レジデンス事業、並びに国際交流基金の助成を受け、二ヶ月滞在型の「長沢アートパーク・アーティスト・イン・レジデンス水彩多色摺り木版制作研修プログラム」が産声を上げ、二〇〇九年まで続いた。短期プログラムも含め、約百三十名のアーティストが木版画の伝統技法を学び、作品を制作。本会議でも永年の活動紹介と共に、集大成として作品が展示された。

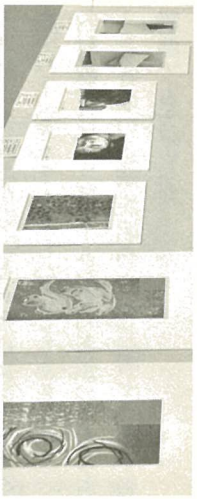
「海外のアーティストが学びたいのは、伝統的な木版画技法なのです。一ヶ月目は、基本指導・彫り・摺りの三つの組み合わせで、摺りの流れや道具、紙など概論的なこと、彫り師さんや摺り師さんに様々な観点から技法を学ぶ体験型学習、二ヶ月目は自主制作というプログラムです。そのうち二つの課題に突き当たりました。参加者が学んで自国に帰って作品を作ろうとする時に、紙や道具の入手が困難、支払決済が複雑、制作上の問題解決方法など、さまざまなバックアップ体制ができていないのです。この辺の課題解決の足掛かりにならないかというのが、今回の国際会議の開催理由の一つです。現実を知ってもらい、みんなで考えて欲しかった。」

写真左:分科会の模様　中:淡路夢舞台国際会議場での本会議参加者達　右:会期中開催された展覧会の模様

http://www.mokuhanga.jp/jp

●淡路島での本会議

海外では討論、発表、ワークショップ、展覧会などで構成される版画会議は非常に盛んだという。アーティストや指導者にとっては、小さなギャラリーで発表する時代から、国際的な場で自分をアピールする時代へと方向性が変わってきた。八つの分科会は、木版を通した国際交流、木版画指導、今日



の日本の木版画事情、紙や絵の具等の素材研究、地域にアートとして定着していく木版画、社会史的な観点から眺めた木版画の歴史と哲学、木版画技法の工夫などのテーマで多くの参加者が発表を行った。興味深いのは、日本の木版画が紙も絵の具も、薬品処理を必要としないノン・トキシック(無害)で環境にやさしい技法として注目され、美術大学始め教育の場で取り込まれる可能性があることだ。

「木版画が好きな世界のアーティストが和紙を使っても大した販売量にはならないかもしれませんが、教育の中に木版画が入っていくと、将来的にその分野でのニーズが非常に大きくなります。技法の普及は、素材の普及に繋がります。紙だけを持って行っても分からないので、素材の普及を活性化するプログラムを提案して、どこかで仕掛けていかないといけません。木版画を中心にした関連プログラムを考えれば、裏打ちして製本や軸にしたり、屏風に仕立てたりする楽しみ方を知ってもらうことができ、技法も伝えることが来ます。紙も使ってもらえます。根気よく指導者を送り込みながら、技法を伝え、本物は常に日本にあるよう心掛ければ、ものは後から付いてくると思います。」

この会議の参加者は、アーティスト、版画指導者、摺り師、学芸員、ギャラリーオーナー、収集家、学生などで、帰国後の活動に意欲を燃やす人も多く、早くも第二回会議開催の要望もかなり多く頂いているとのことだ。

和紙ミニコーナー

■映画「ヘソモリ」ロケ地巡りツアー開催

越前和紙の工場やそれを取り巻く自然を舞台に、日本のへそにある「祠(ほこら)」を守る越前和紙の紙漉職人とその仲間が繰り広げる青春ファンタジー映画「ヘソモリ」が、九月三日、福井県内の三映画館で封切られた。初日には、監督の入谷朋視氏、主演の永島敏行さんを始め、九人が舞台挨拶に立ち、映画を通じて福井をアピールしたいとエールを送った。

▶へそ　大瀧神社◀

この映画は、全国でも珍しい紙の神様「川上御前」を祭る岡太神社・大瀧神社や、名だたる日本画家に紙を提供してきた三代目岩野平三郎氏の工房などで撮影され、越前和紙の里の自然豊かな歴史あるまちの魅力も伝えている。福井県和紙工業協同組合では、この映画撮影に全面協力し、和紙のプレミアグッズも製作した。

八月二十日には第二回目のロケ地巡りツアーも開催され、残暑の中、約四十名の参加者は大瀧神社、岩野平三郎製紙所、和紙の里・五箇地区を一望する秋葉山、卯立の工芸館等を巡った。

ヘソモリの公開は約六週間。県外では、石川、富山両県で公開が決まっており、配給元では反応をみながら期間延長を検討したいという。

情報欄

●イベント情報

■丹南産業フェア2011
時:平成23年9月17日(土)～19日(月)
場所:サンドーム福井
ヘソモリPR展示・体験・即売あり

■伝統工芸品月間全国大会
時:平成23年10月27日(木)
場所:会津アピオスペース(会津市)

■平成23年伝統工芸ふれあい広場
時:平成23年10月28日(金)～30日(日)
場所:会津アピオスペース(会津市)

岩野平三郎製紙所にて
ヘソモリツアーでのひとコマ

●映画「ヘソモリ」

10月中旬まで福井県内の3館で上映中。10月8日より石川県・富山県で上映予定。また東宝系列の劇場で全国上映の予定です。ぜひ映画館にてご覧ください。
公式サイト:http://hesomori.com

●「和紙の里」32号ができました

「越前和紙を愛する会」が永年発行している「和紙の里」の32号ができました。和紙の原料の源流とも言える「カジ」について、「越前和紙と日本銀行券」、レンブラントの和紙などの記事を収録しています。
お問い合せ:福井県和紙工業協同組合内
「越前和紙を愛する会」事務局　担当:蓑輪

編集後記

四国中央市の商店街には映画「書道ガールズ」のロケをした店が案内してあったので、レンタルビデオで借りてきてみた。紙工場の煙突がどこからでも見える紙の街の青春映画で、若い人に受けたそうだ。今年も「書道パフォーマンス甲子園」が行われ、全国から集まった高校生のグループが、6×4メートルの巨大な紙に音楽に合わせて手拍子やダンスしながら書道をした。毎年参加校は増え、今年は応募が多く11校にしぼったという。取材当日は、折しも花火大会の日で、夜空に大輪の花が咲いた。

季刊・和紙だより 第32号(2011年秋号)　発行日:2011年10月1日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人:福井県和紙工業協同組合　山田益弘　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所:Office YOMOSA　〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL: 075-712-8834　FAX: 075-702-6223　E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子
※無断での転写・転載はお断りします。